錦絵の緑・紫の混色表現における青色色材の変遷について

The Change in the Blue Colorants Used in the Making of Green and Purple Colors in *Nishiki-e*

大和あすか

YAMATO Asuka

はじめに
❶調査対象資料
❷調査方法
❸結果と考察
おわりに

［論文要旨］

本稿では，青色色材が変化したとされる文政期以降の錦絵に着目し，青色箇所に用いられた色材が変化した際，青色を混色して彩色する緑色と紫色に用いられる青色色材も同様に変化するのかを検討するため，国立歴史民俗博物館に収蔵された錦絵 37 点に対して調査を実施した。調査には，光学顕微鏡による通常光と紫外線蛍光観察，蛍光エックス線分析法，可視光反射スペクトル分析法を用いた。

結果，文政十二年（1829）の錦絵の青色箇所では，従来用いられていた天然染料の藍から，海外で製造された安価な合成顔料であるベロ（プルシアンブルー）が使われ始めることを確認した。青色と黄色の色材の混色によって表現される緑色箇所においては，錦絵の青色箇所にベロの使用が浸透していく中で，わずかな誤差を持ち，後を追うかたちで藍からベロへと変化し落ち着いた。しかし，青色と赤色の混色である紫色箇所においては，青色箇所の色材が藍からベロへと使用が変化した文政末以降も，その変化に影響を受けず，文久元年（1861）頃まで天然染料の藍や露草を青色色材として用いていた。しかし，慶応期頃から，従来の紫色に用いられていた赤色有機色材が使われなくなり，合成染料と思われる赤紫色の色材が利用されるようになると，長年紫色の表現に利用されていた露草や藍といった天然染料の青色色材が全く使用されなくなり，合成顔料であるベロが混色の色材として用いられるようになった。

【キーワード】錦絵，露草，藍，プルシアンブルー